

アクターネットワーク理論と実践コミュニティ理論の再考

小 松 秀 雄

Reconsideration of the Theory of Actor–Network and Theory of Community of Practice

KOMATSU Hideo

Abstract

In the eighties of the 20th Michel Callon, John Law and Bruno Latour have constructed the theory of actor-network in the field of science and technology studies. Then in the nineties Jean Lave and Etienne Wenger have proposed the theory of situated learning and community of practice. In the first chapter of this paper I intend to consider the theory of 'hybrid collectives (communities)' and the concept of 'translation' which M.Callon (French sociologist) has developed in his theory of actor-network. Callon has criticized traditional sociologists for 'social constructionism'. And in the second chapter I investigate the situational approach and theory of community of practice while I take up the literatures such as "Situated Learning" (1991.) and "Communities of Practice" (2002.). In the final chapter I attempt to apply the theory of actor-network and the concept of community of practice to the downtown area (Yamabokocho) of the Gion Festival (Gion Matsuri) of Kyoto in the modern society.

キーワード：アクターネットワーク、ハイブリッドな集合体、翻訳、状況に埋め込まれた学習、
実践コミュニティ

Key words: actor-network, hybrid collectives, translation, situated learning, community of practice

はじめに

社会学にかぎらず近代の人文社会諸科学は、20世紀中頃までは人間に焦点を当てて社会と文化を研究し、優れた成果を生み出してきた。1950年代になると、人間中心主義の近代的価値観と学問研究に対しては、人類学や言語学の構造主義、およびミシェル・フーコー等が異議を唱え、言語（言説を含む）に焦点を当てる方法も登場してきた。現在では多くの場合は、人間と言語を中心とする方法に基づき社会現象と文化現象を規定し、研究を進めている。それはそれで相応の成果を上げているので構わないとしても、今や人間社会が科学技術を発展させつつ作りだした大量の多種多様なモノの集合が、社会現象と文化現象を構成する重要な要素になりつつあることを考えると、人や言葉だけでなくモノを対等に取り扱う研究方法も再評価すべき時ではなからうか。

本稿では、まず、人・言葉・モノのネットワークの研究を進めているアクターネットワーク理論（the theory of actor-network）の方法を考察してみる。続いて、独自の学習理論とコミュニティ理論を提示しつつ、多様な分野で活発に事例研究を展開している実践コミュニティ理論（the theory of community of practice）の基本的観点と主な概念を整理しておこう。さらに、アクターネットワーク理論と実践コミュニティ理論を関連づけて研究に活用できる方法論的可能性について展望してみたい。

1. アクターネットワーク理論の方法

アクターネットワーク理論は、1980年代後半からフランスのミシェル・カロンとブルーノ・ラトゥール、イギリスのジョン・ローが中心になって発展させた理論である。系譜を眺めると、科学技術の研究（the science and technology studies）の分野に理論と事例研究の主たる源流があるが、ここでは深入りしないでおこう。筆者の専門分野である社会学との関わりでは、たとえば1950～60年代におけるロバート・マートンとピーター・バーガーの科学知識の社会学の流れがある。1970年代以降、バーガーの「現実（日常的知識を含む）の社会的構成（the social construction of reality）」の視点が科学技術の研究の分野にも影響を与え、科学技術の社会的構成（the social construction of scientific and technical realities）をめぐる論争が展開されていく。こうした論争の中では、より科学技術の内部に踏み込んだ研究として、人類学的実践理論とフィールドワークに基づく、ブルーノ・ラトゥールの「実験室の人類学」をあげることができる。科学技術研究の論争の詳細はさておき、1980年代中頃にアクターネットワーク理論が提唱され、論争の過程で方法を整備しながら事例研究を積み重ねてきた。アクターネットワーク理論の誕生から二十年ほど経過した現在の時点からふり返ると、科学技術の社会的実践理論を軸にして社会構築主義と技術決定論を批判（自己批判も交え）しながら、現場のフィールドワークに基づき「社会と技術のダイナミックな関連」を研究してきたといえよう。

(1) アクターネットワークとハイブリッドな集合体

さて、アクターネットワーク理論といっても多くの研究者の学説と多様な事例研究があるが、社会学の立場から見てミシェル・カロンが代表的な理論を提示し事例研究を展開しているので、彼の方法と事例研究を中心に考察していこう。

基本的立場としては、人・社会とモノ・自然の区分に依拠して人・社会の側からモノ・自然を把握する観点をカッコに入れ、人・社会・言葉・モノ・自然のネットワーク（つながり・関係）の観点から人や社会や言葉、あるいは、モノや自然を把握しようとする。要素還元主義ではなく、文字通りネットワーク論であり、モノや自然をネットワークの構成要素として人間や社会と対等に取り扱い、さらに、固定論ではなく、再生産を組み込んでいる生成・変容論である。近年、パーソナルネットワークや社会的ネットワーク等のいろいろなネットワーク論が人文社会諸科学の研究に使用されているが、アクターネットワーク理論ではハイブリッドな集合体 (hybrid collectives, hybrid communities) ないしは異種混合性 (hybrid) の観点からネットワークを捉えようとしている。人・社会・言葉・モノ・自然のネットワークは、人間と社会に限定されない、モノと自然という異質な存在を組み込んだハイブリッドな集合体になる。既存の社会学からすれば、家族という小集団、学校や企業という中間集団、全体社会レベルの国家という大集団まで集団はいずれも人間集団 (human group) であり、人間の行為を研究対象に据えることが当たり前のように見なされてきた。これに対して、ネットワークと集団のハイブリッド的特性 (異種混合性) を強調するアクターネットワーク理論は、モノや自然にも行為能力 (エージェンシー、行為主体性 agency) を認め、モノや自然を人や社会と同等の行為者 (アクター actor) あるいは行為体 (エージェント、行為主体 agent) として研究対象にする。カロンは、彼の理論の基本的立場と概念について近年の論文において次のように述べている。

「イノベーション (何らかの技術やモノや制度の発明=革新) を創案し、デザインし、開発し、使用するのは集合体である。……集合体は様々なアクターのコンピテンス (潜在能力) を結びつける。……そのような一風変わったメルティングスポット (るつぼ) は人間と非人間の混合物なのである。私はこうしたイノベーションの新しいアクターたちを表象するために共同体 (communities) 或いは異種混交の集合体 (hybrid collectives) ということばを使用する。」(ミシェル・カロン (川床靖子訳)、2006年、「参加型デザインにおけるハイブリッドな共同体と社会・技術的アレンジメントの役割」、上野直樹・土橋臣吾編『科学技術実践のフィールドワーク：ハイブリッドのデザイン』せりか書房、40頁)。

「デザイン・コミュニティを、単に強力なそして洗練されたテクノロジーを結集する人間の連合体と見なすことはできない。テクノロジー、特に、情報・コミュニケーション技術は集合体を形作り、新しい思考と行動の方法を啓発する真のアクターとして扱われなければならない。……非人間物が社会的に積極的な役割を持つと認めれば認めるほど、私たちは人間の本質をより一層豊かなものにすることになる。」(同書、47頁)。

モノや自然を人と同等の行為能力をもつアクターとして取り扱う方法は、文学と法律学などの分野でしばしば取り上げられる擬人法と必ずしも同じではない。どちらかといえば、これまでの民俗学と人類学が「道具と人間の関係」、あるいは、「植物と人間の関係」などについて研

究する際に依拠してきた立場に近い方法である。道具は人間が生活の必要に応じて作りだしたモノであり、アクターとしての人間が自分の行為能力によって生活のために道具というモノを使うから、道具は行為体（行為主体）ではないし、行為能力（行為主体性）をもたないモノと考えられるかもしれない。ただ、道具によって人間のあり方と行為の仕方が変わるとすれば、道具にもアクターの特性と行為能力を認め、人と道具のネットワークによる活動・変化・結果の過程を研究することは貴重な成果をもたらすのではなからうか。通常の道具に限定せずに衣食住全般の生活に登場する衣類、食物、建物、自然などのモノもそれぞれ固有のアクターであり、相応の行為能力をもつモノとしてアクターネットワークの研究対象にすることができるだろう。

もちろん、こうしたアクターネットワーク理論の研究方法は、近代以前の自然崇拜やアニミズム（精霊信仰）の思考に類似しているように思われるけれども、超越的な存在や超能力に諸現象の原因を求め説明する立場ではない。むしろ、近代の人間中心主義と合理主義を批判したクロード・レヴィ＝ストロースが構造主義的人类学研究の過程で、西洋以外の地域の「未開社会」の中に見出し「野生の思考 (la pensée sauvage)」と名づけた立場に近いかもしれない。アクターが人間であれ非人間物であれ、アクターの特性とエージェンシーは、本来的に備わっているアクターの個人的ないしは個体的属性でもないし、不可思議な神仏の力によって産み落とされる超常現象でもない。人とモノが相互作用しながら固有のアクターネットワークを形成することによって生まれる創発的屬性 (emergent properties) である。人とモノのアクターネットワークの再生産と変容の過程で各アクターの特性とエージェンシーは再生産されたり変容し、ネットワークの崩壊の過程で各アクターの特性とエージェンシーも崩壊し消滅するかもしれない。創発的屬性の観点から、タルコット・パーソンズがシステム理論を構築する過程で提唱したものであり、レヴィ＝ストロース等の構造主義にも通底する集合主義的立場を表している。ただし、アクターネットワーク理論は、通常のシステム理論と構造主義とは異なり、非人間物、つまりモノにもアクターの特性とエージェンシーを認め、人間に劣らない重要な研究対象にする。

本稿の3章で少し詳しく論述する予定であるが、ここで、筆者が調査してきた京都の祇園祭を事例にして、人・社会・言葉・モノ・自然のネットワーク、すなわち、異種混合のハイブリッドな集合体についてごく簡単に検討してみよう。現代の祇園祭のハイライトである山鉦巡行は、32の山鉦町が連携することによって実施されている。一つ一つの山鉦町という存在は、その町に住む住民だけでなく山鉦を支える外の人びとから構成されると同時に、山鉦、必要な道具、町の建物と道路などが欠かせないモノとして組み込まれているハイブリッドな集合体である。このように、山鉦町はいろいろな人とモノから成り立っている異種混合のハイブリッドな集合体であり、山鉦・道具というモノと人的担い手とが独自のアクターネットワークを作り出すことによって巡行が行われている。山鉦と道具は祇園祭のために人間が創造したモノであるが、山鉦と道具の形態・用途・使用法は人的担い手のあり方と生活・行動の仕方を規定する。異種混合のハイブリッド集合体というアクターネットワークによって住民は生活様式全般を規定されつつ、他方では、そのネットワークを再生産したり変容したりする。モノの重要性

を考えたとき、自治会や町内会を基盤とする祭礼の組織であるかどうかという、人と社会の側面に着目して祭礼研究するだけでなく、祭礼とその町を構成するモノ全般を射程に入れたアクターネットワーク理論を有効に活用すべきであろう。

(2) 翻訳とアクターネットワークのダイナミズム

社会構築主義と技術決定論の論争を経てきた現在のアクターネットワーク理論は、ハイブリッドな集合体＝アクターネットワークを構成する人・社会とモノ・自然の双方を複眼的に研究するために対称的（シンメトリカル symmetrical）アプローチを採用している。ミシェル・カロンはアクターネットワーク理論の有効性を証明するために、いくつかの事例研究を試みているが、その際に、翻訳（translation）の概念を考案しつつ、アクターネットワークの事例分析を進めている。

アクターネットワーク理論の学説史的展開の出発点を眺めると、カロンは、1986年の論文において「翻訳の社会学 (a sociology of translation)」を提唱している。その際に、彼は独自に考案した「翻訳の社会学」を駆使して、「フランスのセント・ブリオーク湾におけるホタテ貝の養殖技術の導入をめぐるアクターネットワークのダイナミズム」を分析している。アクターネットワークの形成・変容・崩壊の過程は、問題化(problematization)、関心づけ(interessenment)、取り込み(enrolment)、動員(mobilization)のモメントから構成されるダイナミックな過程である。4つのモメントを示す用語は、社会学の集合行動論と社会運動論でも類似の意味をもつ用語が考案され使用されているから、特別に目新しい用語であるわけではない。カロンの観念の独自性は、上記(1)で述べたように、人とモノのアクターネットワークを研究の焦点に据えたことにある。すなわち、ホタテ貝の養殖の研究者やブリオーク湾の漁師という人間たちと彼らの行為にとどまらず、ホタテ貝というモノを人と同等のエージェンシー（行為能力、行為主体性）をもつアクターと捉え、ホタテ貝が人間行為者と相互作用しながらネットワークを形成しつつ、いろいろな行為＝作用をすることを認めた。

まず常識的に考えていくと、ホタテ貝の養殖の研究者が「ブリオーク湾においてホタテ貝の養殖を行う構想」に基づき、ブリオーク湾の漁師や関係者などの人間たちの地位と役割を規定しつつ、アクターネットワークを構築しようと目論む。もちろん、アクターネットワーク論では、ホタテ貝もネットワークを構築する際に重要な地位と役割を与えられ、漁師や関係者とともにネットワークのアクターとなる。研究者の問題化をベースにしてアクターの地位と役割が規定されネットワークが構築され（関心づけと取り込み）、そして、ブリオーク湾のホタテ貝養殖をめざす研究と実践的試みが行われていく（動員）。ここまでのアクターネットワークの形成過程は、あくまでも養殖の研究者というアクターから見た翻訳の過程である。この翻訳の過程が、その後、ブリオーク湾において養殖技術が見事に成功しネットワークに拡大と再生産に至るか、逆に失敗しネットワークが崩壊することに行き着くのかは、事後的にしか分からない。カロンの研究によると、研究者と漁師たちの努力にもかかわらず、ホタテ貝はブリオーク湾に定着せずに失敗する。

ホタテ貝という人間以外のモノをアクターと捉えるカロンの方法論から考えると、ホタテ貝

が人間行為者たちに逆らって行為し、あるいは、協力しなかったためにネットワークが崩壊していくわけであり、そこにはホタテ貝の「意志や思い」とエージェンシーが作用していた。ホタテ貝もアクターとして問題化、関心づけ、取り込み、動員を試みつつ、ネットワークを構築したけれども、ブリオーク湾には定着できずにアクターネットワークは再生産されなかった。

このような翻訳の枠組みに依拠して、養殖研究者、漁師、関係者、ホタテ貝などの個々のアクターを焦点にして翻訳過程、つまり個々のアクターネットワークの形成・変容・崩壊の過程を探求する作業は欠かせない。特定のアクターを固定して、アクターネットワークというハイブリッドな集合体のダイナミズムを研究する方法は貴重な成果をもたらすだろう。1990年代からカロンは、アクターネットワーク理論と「翻訳の社会学」を調琢するためにビジネスの分野におけるイノベーション等の事例分析に進んでいくが、イノベーション過程における特定のアクターを焦点にした研究は他の研究者にも広がりつつある。ただ、最終的には複数のアクターを同時並行的に分析する複眼的視座が要求されるとすれば、アクターの数だけ問題化・関心づけ・取り込み・動員のプロセスが存立するため、これまでの社会学の行為理論とシステム論が直面した「個人主義と集合主義の総合」ないしは「主観主義と客観主義の総合」の難問（アポリア）も含まれているように思われる。それは、今後のアクターネットワーク理論の重要な研究課題となろう。

2. 実践コミュニティ理論の基本的観点と主な概念

科学技術研究をめぐる論争の過程で1980年代になってアクターネットワーク理論が提唱され、その後は人文社会諸科学全体に急速に浸透したわけではないが、当初の科学技術の分野以外に経済、教育、地域社会、国際社会、情報、医療などをテーマとする分野に着実に広がりつつある。ただし、ネットワークのエLEMENTとして人とモノを同等に、かつ同時に研究しようとするアクターネットワーク理論は、筆者の専門である社会学とは基本的観点や概念の相性が必ずしも良くないためか、この二十年間は余り浸透しなかった。

そこで、社会的に活用するために、実践コミュニティ理論を取り上げ、アクターネットワーク理論との接合の下ごしらえをしてみよう。キーコンセプトは、状況的学習（状況に埋め込まれた学習）、実践、および、コミュニティである。

（1）状況的学習と実践コミュニティ

アクターネットワーク理論とは理論の系譜や分野は多少異なるが、1990年頃から実践コミュニティ理論が登場してきた。社会学の伝統的な行為論と集団だけではなく、マルクス主義・現象学・構造主義の影響を受けたピエール・ブルデュー等の実践理論、および、認知科学・言語学の発想を組み込んだ学習理論が実践コミュニティ理論の下地になっている。1991年にジーン・レイブとエティエンヌ・ウエンガーが提示した「状況的学習（状況に埋め込まれた学習）(situated learning)」の言説から見ていこう。レイブとウエンガーは学習と実践とコミュニティ（共同体）を関連づけながら、次のように規定している。

「学習を内化として見るのとは対照的に、学習を実践共同体（コミュニティ）への参加の度

合の増加と見ることは、世界に働きかけている全人格（whole person）を問題にすることである。学習を参加と見なすと、それが進化し、絶えず更新される関係の集合であるというあり方に注目することになる。これはもちろん、社会的実践の理論の典型的な考え方である、人、行為、さらに世界を関係論的に見る見方と軌を一にする。」（ジーン・レイブ&ウエンガー（佐伯胖訳）『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』産業図書、平成5年、25頁）。

ここに引用した文章から学習と実践コミュニティの関連が明確に読み取れる。社会における実践を学習として把握すると同時に、コミュニティ（共同体）への参加と見なす。実践の過程で人・モノ・世界の関係の集合が形成・再生産・変容すると同時に、実践する人の人格（身体を含む）も学習を通じて形成・発達・変容していく。状況的学習理論と実践コミュニティ理論の宣言書ともいべき『状況に埋め込まれた学習』では、実践、学習、コミュニティの相互関連を例証するために、ユカタンの産婆の徒弟制、ヴァイ族とゴラ族の仕立屋、海軍の操舵手の徒弟制、肉加工職人の徒弟制、断酒中のアルコール依存症者の徒弟制という5つの事例が分析されている。徒弟制のコミュニティに新参者として参加した人は、親方などの古参者に指導されながら学習＝実践する過程で知識と技能を習得すると同時に、人格（心身）全体も変容し厚みを増していく。レイブとウエンガーの言説では、正統的周辺参加（legitimate peripheral participation, LPP）という概念を提案して、「状況に埋め込まれた学習」の社会的・人格的軌道を描こうとしている。正統的周辺参加の概念は実践＝学習の軌道の両義的な特徴を描き出そうしているため、誤解されやすいように思われる。たとえば、新参者が徒弟制のコミュニティ（共同体）の正式なメンバーになって古参の職人たちと相互作用する過程で、必要な知識と技能を学習し熟練するにつれ、より重要な地位と役割を得るようになっていく。そこからは周辺から中心へ移動する軌道を想像しがちであるが、直線的な上昇や熟練ではなく、失敗と再形成を含む試行錯誤的なサイクルになり、より高いレベルの熟練に到達するためには絶えず周地的な立場と視点をもつことが大切である。

さて、状況的学習と実践コミュニティはどのようにモノと関わるのだろうか。この問題については、とりわけアクターネットワーク理論が注目した点である。道具などのモノを操作する技能が重要な学習テーマとなる徒弟制の実践コミュニティを分析したレイブとウエンガーは、次のように述べている。

「テクノロジーを含んだ参加が特に有意義なのは、一つの文化的実践のなかで利用される人工物とその実践の遺産をかなりの部分で引き継いでいるからである。たとえば、操舵手が用いる指方規は航海の道具として何百年もかけて発達してきたものであり、古い時代に発明された計算法が具体化されているからである。……実践コミュニティ（共同体）内の知識と、対象を知覚したり操作したりするコミュニティ（共同体）に特徴的であるやり方は、多かれ少なかれ露呈した形で人工物の中にコード化されている。」（『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』84～85頁）。

人とモノの間を媒介する道具と機械などのテクノロジーが取り上げられ、状況的学習＝実践や実践コミュニティとの関係が具体的に分析され論述されている。あるテクノロジーを学習することは、そのテクノロジーの形態・用途・方法に則して実践することを意味しており、メン

タルな知識にとどまらず身体の操作の仕方（身体技法）を学習＝実践することになる。また、テクノロジー、つまりモノを操作する知識と技法は実践コミュニティの共同資本であり、実践コミュニティに参加しメンバーとして活動することは、コミュニティのテクノロジーを学習＝実践することを意味している。ただ、アクターネットワーク理論のように、テクノロジーやモノをアクターとして研究する方法については、明示的に言及されているわけではない。

（２）知識社会＝高度情報化社会における実践コミュニティ

（１）で考察した斬新な「状況的学習理論」は、その後、多様な分野で活用されていくが、提唱者の一人であるウェンガーは、アメリカのコンサルタントたちと共同で最先端ビジネスの世界で「実践コミュニティ論」を発展させていく。今度は徒弟制という伝統的な実践コミュニティの事例分析ではなく、現代の高度情報化社会における実践コミュニティの基本的特徴を説明しつつ、「ナレッジ社会の新たな知識形態の実践的意義」を力説している。発展途上国における伝統的実践コミュニティの研究手法と基本的概念を、現代の最先端の実践コミュニティに適用しているから、大変に興味深い言説になっているといえよう。ウェンガーたちの前向きな説明と言葉を引用してみよう。

「あらゆる業界の企業が、ますます難しくなる知識にまつわるチャレンジを乗り越えるためには、実践コミュニティがなくてはならないということに気づき始めている。彼らはこうしたコミュニティを理解し、育成し始めているのである。……実践コミュニティは所属に限定されるものではないため、どんな組織の境界も超えて価値をもたらす可能性を秘めているのである。……実践コミュニティ（community of practice）とは、あるテーマに関する関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を、持続的な相互交流を通じて深めていく人々の集団である。」（エティエンヌ・ウェンガー他（野村恭彦監修、櫻井祐子訳）『コミュニティ・オブ・プラクティスーナレッジ社会の新たな知識形態の実践』翔泳社、2002年、32～33頁）。

ウェンガーとコンサルタントたちは、『コミュニティ・オブ・プラクティス』において実践コミュニティの概念規定、形態と構成要素、育成の原則、発展段階、および価値評価まで、いろいろな角度から実践コミュニティを説明しつつ現代・将来的意義を強調している。『状況に埋め込まれた学習』の事例とはかなり異なる実践コミュニティが議論の対象になっているけれども、基本的観点と概念はほとんど変更されずに活用されている。そうはいつても、かなり発展段階の違う社会における異質な事例を論述の基盤にしているため、社会学の伝統的用語法から見ると、微妙なズレがありそうである。

上記の引用文から実践コミュニティの基本的特性として、特定のテーマに関する関心や熱意の共有、持続的な相互交流、関連分野の知識や技能の発展という３点を取り出すことができる。社会学的集団論から見ると、『コミュニティ・オブ・プラクティス』における実践コミュニティはアソシエーション（結社）、特にボランティア・アソシエーション（自発的結社）と呼ばれる社会形象であるのに対して、『状況に埋め込まれた学習』における徒弟制の実践コミュニティはアソシエーションではなく、出自等の非自発的契機を基盤とするコミュニティ（共同体）である。ここでアソシエーションとコミュニティの概念規定と分類にこだわっても余り意味がな

いので、コミュニティへの参加と離脱に関する自発的意志の強弱や濃淡に差異があるにせよ、『コミュニティ・オブ・プラクティス』の定義を基準に実践コミュニティについて議論していこう。紙幅の都合上、多少目新しい部分だけを取り上げ、少しだけ検討しておこう。

同じ所属組織内のメンバーであっても、あるいは異なる組織のメンバーであっても、特定のテーマに関する関心や問題の共有による参加と相互交流が、新たな実践コミュニティの形成と発展の原動力となる。コミュニティへの参加や関与の強弱の度合に応じて、コア・グループ(10～15%の中核的メンバー)、アクティブ・グループ(15～20%の活動的メンバー)、周辺グループ(過半数を占める傍観者のメンバー)、アウトサイダー(非メンバー)に区分される。徒弟制のコミュニティでは、親方・職人・見習のような地位と役割の体系が規定されているケースが多いから、コア・グループから周辺グループまでの流動的で不定形な区分は適用できないかもしれない。逆に、変動の激しい現代の個人主義的世界では、多種多様なテーマに応じた無数の実践コミュニティが形成されるから、流動的で不定形な区分は有効な図式となるだろう。2002年の『コミュニティ・オブ・プラクティス』には、1991年の『状況に埋め込まれた学習』になかった現代社会向けの言説や図式が登場している反面では、モノを操作する技能やテクノロジーに関する言及が少なくなっている。ナレッジ社会における暗黙知と知識労働の実践の問題をメインテーマしているためか、人の技能とモノ、あるいはコミュニティのテクノロジーとモノに関する分析は弱くなっている。また残念ながら、モノをアクターとして把握し研究する方法も明確な形では提示されていない。

こうした検討すべき問題点はさておき、インターネットと実践コミュニティの関連について少し考えておこう。『状況に埋め込まれた学習』が刊行された頃から、ハワード・ラインゴールドが『バーチャル・コミュニティ』(1993年)を契機にしてインターネット(オンライン)上の新しいコミュニティに関する理論研究と実証的調査が増加しつつある。『コミュニティ・オブ・プラクティス』は、インターネット・コミュニティ、電子コミュニティ、あるいは、オンライン・コミュニティと呼ばれている現代的・近未来的コミュニティを射程に入れた議論も展開している。たとえば、ネット・ショッピングのために情報と商品のやり取りをするだけの関係は、限定された利益交換にとどまり、絆(きずな)と持続的相互行為を特性とするコミュニティにはならない。経済的利益交換ではなく、子育てをテーマとするネット上の議論からは、子育てのためのオンライン・コミュニティが形成されるかもしれない。定義上、子育てという関心を共有する人びとがインターネット上であれ、持続的に相互行為(コミュニケーション)することを通じて育児の知識と技能を深めていく集団を形成しているから、オンラインの実践コミュニティになるだろう。育児は当事者にとってはかなり切実な問題であり、ネット上で真剣に語り合う過程で一体感や感情的な親近感が生まれ、親密なつながりができる。オンラインのつながりを契機にして、実際に集まって語り合い、「現実の世界」で活動するようになれば、オンラインにとどまらない、リアルな実践コミュニティへと発展するだろう。デジタル化時代の社会におけるコミュニティ論とネットワーク論については、現在、情報科学と人文社会諸科学の研究者とともに共同研究しているので機会を改めて再検討してみたい。

3. アクターネットワーク理論と実践コミュニティ理論の可能性

1980年代中頃に登場したアクターネットワーク理論と、少し遅れて90年前後に提唱された実践コミュニティ理論は、1章と2章で論述したように、それぞれ固有の斬新な観点と概念を備えている。2つの理論を別々に使うよりは、適切に接合して活用する方が分析する力が深くなると同時に、応用範囲も拡大できるだろう。理論的なレベルで接合し、新しい総合的理論を構築することはまだできないので、ここでは京都の祇園祭の山鉾町を事例にして2つの理論を接合する方向を探ってみたい。

社会学の分野でも20世紀の前半からコミュニティの概念をめぐる議論はくり返し続けられてきたが、統一された明確な定義はいまだにないから、絆（きずな）ないしは紐帯（ちゆうたい）と相互作用（相互行為）の2つの要素を目安に3章のテーマを検討していこう。一般的には祇園祭の山鉾町は、特定の範囲の地理的空間という要素が付け加えられた地域コミュニティであると見なされる。その場合は、各町の地理的空間に住んでいる地域住民はコミュニティのメンバーであり、地域組織と地域行事の担い手になる。ところが、近現代の都市化の過程で都心の町から住民が流出し、外部から移動してくる人々が仕事や買い物のために昼間だけ滞在し夜は外部に戻るようになり、本来の地域コミュニティが空洞化していく。祇園祭の多くの山鉾町では、「地域コミュニティ」の側面が空洞化しつつあり、祭りの運営も難しくなっている。四条烏丸の西側にある函谷鉾町では、今や生活のために住んでいる地域住民はゼロになり、主に金融機関と商店などに勤務する人々が「コミュニティのメンバー」になって函谷鉾の祭りを運営している。函谷鉾の祭りの実践という共通の関心と熱意に基づき形成された実践コミュニティであり、祭礼の前後の期間における長年の持続的な相互交流を通じて祇園祭の運営の知識・技能と祇園囃子の知識・技能を深めていく集団である。

函谷鉾町には本来の地域住民が完全に欠落しているけれども、金融機関と商店などの建物と道路があり、そこで平日の昼間だけでも持続的に仕事をしている人々がいるから、モノと勤め人からなる異種混合のハイブリッドな集合体（コミュニティ）が形成されている。函谷鉾町の金融機関と商店、およびそこで働く人々はそれぞれアクターとして活動しつつ、ネットワークを構成しているから、函谷鉾町はハイブリッドなアクターネットワークにもなっている。さらに、外部の関係機関や人々ともネットワークを形成しており、このハイブリッドな集合体は函谷鉾町の地理的空間を越えたダイナミックなアクターネットワークに発展しているといえよう。肝心な点は、人と人の絆や紐帯だけでなく、モノとモノのつながり、あるいはモノを媒介とする人と人のつながりがハイブリッドなアクターネットワークないしは実践コミュニティを構成している点である。

山鉾町には、函谷鉾町のように本来の地域住民がゼロの町だけでなく、マンションが建設されたため地域住民が急増した町、さらには、昔から住んでいる地域住民が少なからず残っている町もある。百足屋町では、55戸前後の地域住民が南観音山保存会を結成し、山鉾巡行を中心とする祇園祭の諸行事を運営しており、百足屋町という地域コミュニティ（地域社会）は、南観音山保存会という実践コミュニティとほぼ重なり合っている。理想的なコミュニティのあり

方とも考えられるが、もちろん2章の(2)で取り上げたように実践コミュニティへの参加と関与の強弱の度合は一樣ではなく、地域住民はコア・グループ、アクティブ・グループ、周辺グループに区分される。状況的学習論の観点も加味して見れば、実践コミュニティに持続的に参加し、組織運営と祭具操作の知識・技能が豊富なメンバーはコア・グループに入るのに対して、参加の期間が長くても技能と意欲の乏しいメンバーは周辺グループに区分される。比較的新しいメンバーでも、旺盛な意欲や熱意があればアクティブ・グループに入ることも可能である。さらに、南観音山というモノを軸にして保存会の実践コミュニティは形成されているとすれば、山鉾そのモノはアクターとして多様な知識・技能をもつ人々、および関連する建物や道具を組織化していると見なすこともできる。つまり、保存会は、山鉾というパワーのあるアクターによって多種多様な技能者とモノが組織化されたハイブリッドな実践コミュニティになるわけである。前述の通り、南観音山というハイブリッドな実践コミュニティは百足屋町の地域コミュニティとほぼ重なり合うが、地域完結型の閉じたコミュニティではなく、外部の関連する人やモノとネットワークを形成している開放型のアクターネットワークである。

京都の祇園祭は、以前から地域内外の多種多様なモノと人が結合されて運営されてきたから、ハイブリッドな視点を備えたアクターネットワーク理論、状況的学習論、実践コミュニティ理論を活用できる研究対象であるが、別の機会に詳しく論述する予定である。祇園祭に限らず、高度情報化、流動化、グローバル化が進む現代においては、ますますアクターネットワーク理論、状況的学習論、実践コミュニティ理論を活用すべき現象が増えてくるだろう。

主な参考文献

- ・ Michel Callon, Law, J, & Rip, A. (edit.) 1986. Mapping the Dynamics of Science and Technology: Sociology of Science in the Real World, The Macmillan Press LTD.
- ・ Michel Callon and Law, J. 1995. Agency and the Hybrid Collectif, The South Atlantic Quarterly 94-2, Spring, pp. 481-507.
- ・ Michel Callon, 2001. Actor Network Theory, International Encyclopedia of the Social and Behavioral Sciences, Elsevier (All Vol. 26), pp. 62-66.
- ・ John Law (edit.), 1986. Power, Action and Belief; A New Sociology of Knowledge?, Routledge & Kegan Paul.
- ・ John Law & Hassard, J. (edit.), 1999. Actor Network Theory and after, Blackwell Publishers.
- ・ Barbara Czarniawska & Hernes, T. (edit.), 2005. Actor-Network Theory and Organizing, Liber & Copenhagen Business School Press.
- ・ Bruno Latour, 2005. Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-Theory, Oxford University Press.
- ・ 柳田國男、昭和42年、『郷土生活の研究』筑摩書房
- ・ 足立明、2001年、「開発の人類学—アクター・ネットワーク論の可能性—」『社会人類学年報』第27巻、東京都立大学、1～33頁
- ・ 経営史学会編、2005年、『ガバナンスと政策—経営学の理論と実践—』文眞堂
- ・ 入江信一郎、2006年、「社会—技術ネットワークの相互的構成—イノベーションの分析事例を探求する—」『科学技術社会論研究』第4号、30～42頁
- ・ 上野直樹・土橋臣吾編、2006年、『科学技術実践のフィールドワーク：ハイブリッドのデザイン』せりか書房

- ・ジーン・レイブ&ウェンガー（佐伯胖訳）、平成5年、『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』産業図書
- ・エティエンヌ・ウェンガー他(野村恭彦監修、櫻井祐子訳)、2002年、『コミュニティ・オブ・プラクティス—ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』翔泳社
- ・ブルーノ・ラトゥール（川崎勝・高田紀代志訳）、1999年、『科学が作られているとき—人類学的考察』産業図書
- ・岡田猛他編、1999年、『科学を考える—人工知能からカルチュラル・スタディーズまで14の視点』北大路書房
- ・金森修・中島秀人編、2002年、『科学論の現在』勁草書房
- ・Sergio Sismondo, 2004. An introduction to Science and Technology Studies, Blackwell Publishing.
- ・上野直樹編、2001年、『状況論的アプローチ1 状況のインターフェイス』金子書房
- ・有元典文・加藤浩編、2001年、『状況論的アプローチ2 認知的道具のデザイン』金子書房
- ・茂呂雄二編、2001年、『状況論的アプローチ3 実践のエスノグラフィ』金子書房
- ・Michele A. Wilson, 2006. Technically Together: Rethinking Community within Techno-Society, Peter Lang.
- ・池田謙一編、2005年、『インターネット・コミュニティと日常世界』誠信書房
- ・千川剛史、2006年、『デジタル・ネットワーキングの社会学』晃洋書房
- ・小松秀雄、1999年、「ブルデューの認識論と実践論の再考—技能・実践共同体・組織をキーワードにして—」『神戸女学院大学論集』第46巻第2号、39-65頁
- ・小松秀雄、2001年、「祇園祭・山鉾町の人びとの心意気—聞き取り調査と資料調査を中心にして—」『神戸女学院大学論集』第53巻第3号、63-82頁

〔本稿は神戸女学院大学研究所、2007年度研究助成金による研究成果である〕

（原稿受理 2007年10月2日）